文化交流 立 場から

昭和五十年入学 稲 賀

異文化摩擦と武道

ようとしたところ、 濤会)から伺った話がある。稽古の モ 神に コ のラバトに指導に出向 対しては額ずくが 受講生たちの拒絶にあった。自分たちは、 それ以外の 最初に道場の いた、パリ在住の日本人空手 対象に礼をすることは 正面に向 か って礼 師範 唯 ーア

とつ 学議論 配慮すべきなのか 貫徹すべきな ッラー 教えに抵触するのだ、 0 困 を招き兼ね 0 難 神を礼拝するのが、 が 0 、端的に露呈している。果たして日本の カン な それとも海外の派遣先では、 い。 ٤ だがここには、 果たして稽古場の 同一の行為なのか否か、これは面 武道の 神棚に 海外振興が 地元の宗教 一礼するのと、 習慣を海外でも 直面 風 倒 な 俗 神 7

剣道 0 神聖視 が 会長に提起した の体育大学では、 すぐにも体験できる。 り込み、 似 国に たような例は、 世界でも、韓国 して、 あって、すでに共有されな 泥や砂の感触を味わいながら稽古することになる。 それゆえ(?)靴を脱ぐという風習は、 「袴に関する建議書」 体育館 なにもイスラー の躍進が著し 韓国にも合気道は普及しているが で靴を脱 がな いが、 VI ム教国 「特殊日本的」 の一件がある。 い。いわば土足のまま道場に上 1977年に李虎岩が でなくとも、 儒教国 な 価値 ソウル大学校の 隣国 観だ であるはず 通常彼 大 0 韓 道場を 韓 剣道 国 0 地 7

羅永 道をやっているのではない、 分岐点が見えている。「剣道」は好きだが (即ち宗主国による《宣教》 相応しい選択だ、 することこそ、 徴である日本の 教授も報告したように、これは 「日本剣道」ではなく「国際剣道」を追求するうえで、 「袴」 との主張だった。ここには、「日本武道」の国際普及 着用をやめ、)と、「武道」 という愛好者も多い。 韓国のズボンたる「パジ」を着 「古典的で偏狭な日本美」 の国際化= 別に日本人になりたくて剣 そしてふと気づけ ◎脱 日本化》 との 0 用 象

きた。 現 断さに欠ける。それでも立ち合いで日本人が勝っているならまだしも、 う状況まで発生しているのに、 指導者に対し 摩擦と形容できる問 を糾弾する論調が現れる。だが「実力」を伴わない抽象的な精神 が失墜する。ここで突然「正しい剣道」なるものが登場し、 して日本人指導者の技術説明は 地に優秀な弟子が育つと、 四 部哲也氏は、 その経 験か ハンガリーで11年にわたって剣道の指導に携わって 5 現 地 題が噴出している、 側からの 沂 年、 日本人範士が負けるようになって、 海外に 批判が囂しく、 阿部氏は強い危機感を表明した。 外 国語 おける武道 と指摘する。 の不如 知意も 日本人指導者排斥と 0 指 加わ 導 とりわけ日 に り お VI 「強い剣道 論理 て、 論 権威 得て 本 文化 的 は 明 い 側

説

得力を欠き、

カコ

えって日本人指導者

への信頼を損なうだろう。

な(語彙あるいは説明原理の)置換が発生しているかにまっ

たく無知

海外進出と武道の危機

されてくる。まず御家芸の失墜について。これらの逸話からは、武道の海外進出の孕む幾重もの問題が炙り出

にこの 意味な規範の横行は 時 増に無理やり対処しようとする場合に発生しがちだ。 (1)およそ芸事には共通する傾向だが、 に発生する。 両者は、 当 該 0 芸事が 指導陣に実力者が払底した場合か、 組 織として発展する段階で、 煩瑣な規則へ そして悪い の拘泥や、 受講者 えてし て同 こと 0 激 無

困 ばいけないのか、 習慣も、 もらえない。 一難を、 (2)加えて、 武道の海外指導者も体験している。 ひとたび海外に出ると、 海外での 国内で稽古をする限り、 その必然性を言語化して説明しなけれ 日本語教育が敬語の教授で遭遇し 質問攻めに会う。 K 理 屈 をつ なぜそうしなけれ ける必 ば受け入れ たのと同様 要も な T

ている

ば、

剣道

防具や竹刀の生産主体は、

既に台湾や韓国にスピンアウトし

が、 事だった。 をフランス 面にフランスで立ち会ったことがある。 言語を解さぬまま現地指導を行う場合が多い。 した。 きに格段の進歩を示し (3)ここには もと弟子の ただ問 また遠目に 人に理 題なのは、 翻 クリスチアン・ティシエ 訳の問題も加わる。 一解可能な説明 た有段者もあって、 山 日本側指導陣の多くが、 口 師範の動きを見ただけで、 へと置き換えて 日本の高名な指導者は、 ティシエ 0 その 通 訳 感化 ゆく 筆者 で合気道の指 が日本人師 翻 訳過 、様は、 t 0 翌日 深 E111 程 さには まことに見 口 でどの からは 清吾 範の言葉 導する場 現地 驚嘆 よう 体捌 師 範 0

れ まま、 たもの、 自分たちの意図がそのまま、 同 一の土俵に立って理解 伝達さ

と素朴に信じてしまう安易さにあろう。

は自分の武器を自分で壊すという、 失策でしかなかっただろう。

武道とその 言語的 説明の アポ

期以来、 だ。 地平に され 文章が 0 が が透けて見える。 カン 訳などを見ると、 お に自らの体感を投影した武芸者の側から見たのとでは では同 なかで選択され るいは神官らの学識によって補ってもらう場合が多かった。 き刺さっ 出会い 不動 実は、 射た」 きく乖 てい 暗 あるい で もあらかじめ 一であろうとも、 心 闇のなかで2本の矢を射ると、 発生したらし る例に頻繁にお目 離していたことも多いだろう。 武芸者 同 0 明らかに鈴木大拙流の禅理解にそって、 無心、 様 実現と見たが、 は過剰解釈が、 これを見て、 のすれ た。 は、 無我 その端的な例が、 日本語原文では単なる技法上の 見合 だが 違い 自分たちの言葉足らずを儒学者や禅宗の僧侶 いことは、 拝借元の学識経験者側から眺めたのと、 伝書に見られるこうした語彙は、 は 0 あるいは禅語の剣刃上とい 『弓と禅』 ていて、 にかかる。 阿波にとっては、 翻訳書読者の、 至るところで発生している。 つとに山 相互に増 阿波研造とオイゲン・ヘリゲル のヘリゲルは そこには、 1本目の矢筈に2本目の 反対に、 田奨治氏の指摘したところ 《東洋の神秘》 この 幅される、 訳者 解説に過ぎなか 武道関係の書物の 色づけられて(誤)訳 件、 った語句が、 無我の射、「それ の学 本当のところ とい その内実は 江戸時代初 識のひ 表現のうえ 0 仏 った状況 簇が突 期 教 待の けら そこ その 用語 0 0 た 英 お あ

近代武道 桎

正確には、 道の最大の 様式化はまた形骸化とも繋がりやすい。 した。 構えを導入しているし、 準ずる立場にあった養神館の塩田剛三は、 さず、 したことからも、 を合理的 の場合で見るなら、 とか合理 の普及におい 卓越した師 前者が警察関係に人脈を広げ、 その日の気分で稽古をつけたのに対し、 に説明し、 的 単純に物理的 問題もまた、 に説明 匠 て、 0 技法の分析的な教程化が、 圧 とりわけ歓迎され 開祖、 一倒的 後に愛気会とは袂を分かち、 伝達可 本部道場長を務めた藤平 おそらくはこの分析敵 な力量や説明不可能な妙技を、 機械論的) 植芝盛平が技の分析的な解説をまったく施 能なものに定式化しようとする。 な技の理解に潜んでい 後者が た様子が そして実は、 接触時 速成の技能習得 1 推察 その ワイ支部 心身統 合理 光 の間 戦 できる。 は 合 的 近代の柔道 前から内弟子 次世代は 0 (ない 発展に寄与 合気道を唱 を強調 技 だが P 0 理 合気道 海外 より 技 L なん 合 剣 0) 7

嘉納の提唱した柔道体育法だった。 判断された問題点を虱潰しに潰すことで確立されたの 術と剣術は体操正科として不適との結論が示されたが、 たことに由来してい 明 治 寒川恒 16 夫、 に文部省が剣術と柔術の体操正科としての 早稲田大学教授も指摘したように、 る。 翌年の答申で、 ここで投げる寸前でとめる 医学と教授法 嘉納 適不 治五郎 が 0 見 ここで不適と 明 地 適を諮問 0 治 カン 柔道 「柔道 年に 柔

育界の れる。 て、 れてはいたが、こちらは結局その 柔道は見事に西欧近代社会のスポーツに仲間入りできる種目となった。 された。 体操法 乱 取り」 顧みられなくなってゆく。 要請にそって洋風に洗練された、 関節技をともなう投げ技、 安全性を確保し、 (掛稽古)や、 から排除され 投げを目的とする「柔道体育法乱取」 た危険な柔術技法も 試合形式に馴染む その限りで、 後、 当て身や関節固め技の大半が、 競技柔道の流れ すこぶるバタ臭い、 近代柔道とは、 技法に限定することで、 「柔道勝負法」 のなかで衰退し に温 明 が 新規設立 治の 提唱さ 除外 存さ 教

危機に直面しての思考停止

0

体育種目だったとい

って間違い

ない

道館)が、 く剛を制す」 が、 国際柔道連盟による段位認定(1981)、 されたが、 戦後になって国 0 っている。 なか さて競技化 また体 で「見事な ずれも日本柔道連盟の反対にもかからわず可決されて現在に至 そもそも競技柔道の出発点となった 「有効・効果」など小手先のポイント稼ぎが競技の中心とな 重 一別の枠内での筋力トレー からは程 0 際的 進展とともに、 本」の な飛躍を遂げた。 体重別制度(1961)、「有効・効果」の導入(1973)、 遠い 再 のが、 評価 柔道や剣道は、 などが 近年の競技の実態となっている。そ ニングが励行されるなど、「柔よ ブルー柔道着の導入(1997)など 国際柔道連盟は 訴えられ 「投げ」 とりわけ第2次世界大 ている(村田直樹氏 0 1951 年に設立 自己目的 化 講

> り、 ば 最初から脱落させている。 合形式は、八 い限界をもつ。 試合のなかで培われた価値観、 いからまず先に傷を負わせるのが先決、 されれば、 け引きならば、 ることへの警戒からか、 とには、 シング競 とは参らぬ以上、 (大矢 か、 イントかを、 て審判が客観的に判別できるのか。 剣道 この とい 稔 本 0 遠間からの詰めには 無軌道な太刀筋でちょっと触った程度の 技のように、 場合にも った問いかけを、 国際武道大学)、 は、 それだけで致命傷となる。 -九歩の さらにその三者の 実践 指一 さらに蹲居の姿勢からすぐに打ち合いに入る現在の 判断は多分に審判の主観に委ねるほ 「気剣体 的な裏打ちも、 本落とせばまず勝負は着くし、 間合い 剣先の身体 なお抵抗もあるようだ。 試合の かえって遠ざける思考停止を招いている。 古流の型などを多少稽古すればわ から相手を見据えて間合いを詰める局面 一致の有効打突」 あるいは美意識としてしか説明できな なかでこの <u>へ</u>の 致 技能的な合理性も まさか気、 接触の 強い相手に対しては、 とする秘伝書もある。 に何ポ 理念の という言葉が語らえるが 先後を電 イント 剣、 しか 技が有効と判定され 実現 手首の 体それぞれ なく、 気で測 カン か ない。 を、 を認定する、 動 真剣 脈を切り あくま 何 かるとお 定するこ とすれ フェ に何ポ でもよ で か にし 0 試 駆 断

この重 対捌きを体得している剣士はごく少数だろう 教程として課していない。 心 技体いずれも大変な充実が要求される。 主要な局で 面を捨象する 日本剣道型の稽古だけで、 一方、 鍔 競り技も六段以上 現在 0 竹刀剣道 これらの多様な 0 高段者にしか 試合は、

そして「一

本

至上主義が、

なぜ

「投げ」なのか、

本」とは何なの

ば、 では相 標 カン 骨折をまねく関節技で相手を制するの り、 に、 投げ技 全に受け身の取れる投げなど、 同 L 肩 であることが でしか 様 て、 カン 翻 柔道 あえて受け身を取らず、 0 5 0 手の 下肢を や攻防その て柔道の 同 一にあ 意味をもち得ない、 剛 時 た本末転倒 動 道 に きを っても、 堅く緊張させて後ろに投げ出すことで凌ぐ、 落ちることを判 0 再 封じ込めるために、 傾 to 本 確 向。 0 認され 「投げ」 は枚挙に暇がない。 が大きく変質を被ってい は、 投げ技で落下しても、 今日の立ち技では、 その限りであくまで そし わざとうつ伏せで着地して、 定基準としており、 実践的には て _ が、 固 本勝ち」 め 当然だった。 技に移行 無意味であり、 そもそも柔術であれ 肩を畳に付け る。 は、 「虚 それに影響され V スリング同様に もろ手刈 構」 試 こうしてみれ 関節 合の規則 投げの としての V 膝を痛めた 0 な スリング りにたい 脱 ば VI あと ため 0 臼 て

安

武道 本 質 論 0 陥

ぶとい 精 VI 隊 き合い、 外も当然含まれ 理解」 神に戻れと号令を掛 こうした試 0 実力によっ った姿勢を示すだけでは や(日本)武道の 安心してい 合至上主 える)が て揺らぎ るに過ぎず、 け、 一義の 同 本 0 武道憲章(日本武道協議会 質をめぐる議論で 始めると、 価 価 値観にあって、 値観を共有していることを確認 身内 武道 の内通者(これ 必ず出現するの の国際化に対応してゆくには 、ある。 お膝下の権 だが には 1987)6 が、「武 嘉納 日 威 本 が 道の 国 精 治 外 籍 神を貴 五 て領 者以 郎 人部 正 0 L

> うだろう。 確認しておきたい。 0 腕力の差に呆れ L 値 あまりに不十分だろう。 て、 観との対峙 た体験か とんでもな 以下、 6 たり、 止揚を含む過程 翻 基本的 って日 い リー 黒アフリカ出身者 国際化とは、 論点を手 本に発達した武 F のパ ンチを食らって当 だから 短に だ。 日本の価値観とは 復習するに止める 術 0 跳躍力に 北欧出身者とお 0% 理 を考 惑 驚嘆し したり、 え直 が 相 たり、 手 5 あ 合 n まりの 点ほど わ な とい せ い E を 価

両

性が外 は防御反応であることを確認した (1)まず、 部からの 自ら 圧 0 力に 正 統 よって危機に 性を声 高に叫 瀕 ぶのは、 L た 場合の、 多くの 反動 場 的 合、 保身あ その 正統 る

る。 るの 翻っ る」、という漢字の た納得が得られ 好者に説 床を掃き清めるのかを問い 0 る。 忘れまい はしない ではなく、 (2)次に、 文化摩擦を、 は て、 自 至難)、 明としてい 明する努力を傾けるところか 異質な価値観との 日 イスラーム圏での礼の拒絶や、韓国で 本の武道の特質を浮き彫りにしてくれる、 (日本)武道とは何かという問 その教訓を手 力ずくの ない 解消すべき障害と見る替わりに、 た前 一武 場合(イスラ 提が 覇権主義 0 根本精 直 崩されたときに、 掛 接触にお し、 カン ŋ (ンに、 神に逆らう自己矛盾を犯すことにな それを納得できる言葉で、 同意を取り付けるの ム圏や韓国で神 5 なぜ道 て、 11 、は、 国際 改め それに感情的 場で神棚 化 の土 て問 あくまでそれを当然と は始始 道 むしろ文化摩擦 足道 VI んは、 貴重 に柏 まるだろう。 直され 0 場 理 手 に な 0 「戈を 一解を 海 を 反 教 実 たことを 発 訓 態 止 求 する 0 5 (は を 8 8 ま 同 あ

目 な

お手合わせとして楽しみ、そこから新しい関係を築いてゆくことが大

切だろう。

れ、 祥の地 本固有の「日本武道」を再定義する《内向き志向》もあれば、 も異質となる。 る欧州型の価値観とでは、 る北米式の文化土壌と、 輸出産業のひとつと見るならば、 (3)文化は越境すれば、 利用されるかは、 のパテント擁護とその そのなかで、 予測を越える。生産者側が製造物責任を問われ 反対に消費者にも相応の使用責任があるとす 必然的に変質してゆく。 すでに日本の武道関係者が果たすべき責任 国際的に通用する「武道」とは別に、日 「正しい世界的発展」 輸入さきでそれがどのように消費さ 武道も輸出商品 に貢献することを 逆に発

主義 議論は、 したい。 産過程での、「術」の次元の形骸化を繕うお題目でしかないことに注意 に過ぎない場合が少なくない。 (4)なかでも「道」 0 帳の内に隠すような選択は、 えてして、 勝つのが目 未熟な技の言い訳による、 的ではなくて精神の修養こそが大切だ、 を強調することが、 武道なり武術を、 合理的な説明を省略した、 しばしば家元における再生 空虚の権威維持の便法 実体の欠如し といった 居丈高 た神秘

には家元の社会学を見て取る必要があろう。

既得権へ

もって使命とする、「伝道師」志向もあるだろう。だがそのいずれもが、

の外的侵害に対して自己防御にこれ務める立場ならば、

そこ

らより高い境地を磨いてゆく機会としたい。武道、武術とは、けつし(5)むしろ異文化を言うならば、異文化と切り結ぶことで、そこか

な国粋主義の覇権論の裏返しでしかあるまい

接触を司る媒体であり、媒介としての「武」を介して、文化間の相互「武」とは、対峙する両者あるいは異文化間の(身体的あるいは精神的)て一部の人間が国の宝として崇め奉る信仰の対象ではない。むしろ

理

解を練ってゆくべきなのだから。

遠征とうかがった。それが貴重な交流の機会となることを祈りつつ、創立50周年を迎え、東京大学合気道部は、ドイツ、ポーランドに

もしも拙文が何らかのお役に立てるならば幸いである。

を要約したもの。最後の一文のみを、『赤門合気道』の為に、加筆した。世紀の日本武道の行方』 2003 年11月18-22日、における筆者の発言*以上は、国際日本文化研究センター 第23回国際研究集会 『二十一

皆様のご批判をお待ちしたい。

国際日本文化研究センター/総合研究大学院大学